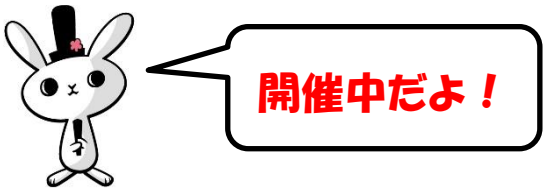
太宰府市
公文書館通信

2022. 7
vol.6

太宰府市市制施行 40 周年記念
太宰府市公文書館パネル展



令和の都太宰府ゆかりの人々
～『太宰府人物志』から～

昭和 57(1982)年４月、太宰府町に市制が施行されました。令和４(2022)年度はそれから数えて 40 年という節目の年度にあたります。また、30 周年の折には人物を通して太宰府の歴史を繙(ひもと)く『太宰府人物志』が刊行されました。

このたび、公文書館では、市制 40 周年の節目にあたって、この『太宰府人物志』を基に太宰府ゆかりの人々を紹介するパネル展を企画しました。太宰府の歴史を顧(かえりみ)れば、数多(あまた)の人物がそれを彩(いろど)ってきたことが知られます。パネル展では、古代・中世・近世・近現代から、それぞれ２人ずつ、計８人を取り上げています。それぞれの時代を生きた人物の足跡をたどりつつ、太宰府の歴史に触れて、その魅力を再認識いただきたいと思います。ぜひご観覧ください。

■ 展示日程・会場

日　時：① 令和４年　７月 15 日（金）～　８月 12 日（金）
　　② 令和４年　９月 ７日（水）～ 10 月 10 日（月・祝）

会　場：① 太宰府市役所１階 市民ギャラリー（市役所開庁時）
　　② 太宰府市文化ふれあい館エントランス
　　（月曜日休館、ただし 9/19〈翌 20 日休館〉、10/10 は開館）

※どちらの会場も、観覧無料です。
※会場は変更になる場合があります。公文書館にお問い合わせください。

令和の都太宰府ゆかりの人々（１）古代

大伴旅人　おおとものたびと

大伴旅人は、奈良時代の初め、帥（大宰府の長官）として大宰府に赴任してきました。在任中の天平２(730)年、自邸で開いた「梅花の宴」の序文（『万葉集』巻５）が、現在の元号である「令和」の典拠となったのです。大宰府政庁跡の南東にある大宰府展示館には、この梅花の宴を博多人形で復元したジオラマが展示されています。また、北西に位置する坂本八幡宮は、梅花の宴が開かれた旅人の邸宅の候補地の一つとして、多くの人びとが訪れる観光スポットとなっています。

梅花の宴ジオラマ（山村延燁製作）
（公益財団法人古都大宰府保存協会蔵）

坂本八幡宮

藤原高遠　ふじわらのたかとお

藤原高遠は平安時代中期の公卿で、11 世紀初頭に大宰大弐となり、大宰府へ赴任してきました。高遠には、私家集『大弐高遠集』があり、それには高遠が、大宰府に到着した時に詠んだ次の歌が収められています。

府に入る日、水城の関に、少弐・府官など迎えに集まり来たり
石垣の　水城の関に　群れ迎う　内の心も　知らぬ諸人

この詞書によれば、現地の少弐・府官などが水城まで出迎えに来ており、大宰府では境迎（新任の官人を出迎える儀式）が水城で行われていたことが分かります。

また、『万葉集』によると、大宰帥大伴旅人が都に帰る時にも、やはり水城で官人たちと別れを惜しんだことが記されており、水城が大宰府へ往来する際の境界と考えられていたことが分かるのです。

現在の水城東門付近、中央が水城堤

令和の都太宰府ゆかりの人々（２）中世

少弐頼尚　しょうによりひさ

少弐頼尚は、太宰府を本拠にして南北朝期（14 世紀）に活躍した武将です。この時期には、室町幕府（北朝）・南朝・足利直冬（尊氏の庶子）の勢力が入れ替わり太宰府を制圧し、頼尚はこれらの動向の中で複雑な動きをし続けます。建武３（1336）年に足利尊氏が九州に下ると、頼尚は尊氏に従い幕府に属しましたが、幕府の九州統括を担う鎮西管領の一色道猷と対立します。一色氏が少弐氏の本国である筑前に本拠を置いたため、両者の間に利害の対立が生じてしまいました。

貞和５（1349）年に足利直冬が九州入りすると頼尚は直冬を太宰府に迎えて一色勢と戦います。文和元（1352）年に直冬が長門（現山口県西部）に移った後は、懐良親王の南朝方と結び、同２（1353）年に針摺原（現筑紫野市針摺）の戦いで一色勢を破りました。後に頼尚は幕府に帰順しましたが、延文４（1359）年に大保原（現小郡市大保）の戦いで南朝方に敗れて衰退します。

針摺峠付近（針摺原古戦場に比定される）

飯田興秀　いいだおきひで

飯田興秀は大内義隆の家臣で、戦国期のうち 16 世紀の前半頃に御笠郡（当時は「三笠郡」とも記す）の郡代に任じていました。郡代とは大内氏が郡ごとに置いていた代官で、家臣等に領地を与える時に、郡内の土地を給付（打ち渡し）する業務などを行っていました。

御笠郡代の場合は、太宰府天満宮との連絡・交渉役も果たしています。興秀は文化人でもあり、太宰府天満宮で催されていた月次連歌の毎月の担当者を定め、自らも正月の連歌を担当しました。

また飯田氏は弓馬の故実に詳しく、大内氏に仕える一方で故実の伝授もしていました。興秀は郡代在任中の天文４（1535）年、太宰府の岩屋城にて、平戸（現長崎県平戸市）の松浦氏の家臣籠手田定経の求めに応じ、故実を伝授しています。岩屋城は御笠郡における大内氏の支城で、郡代が城督を兼ねていたとされています。

岩屋城跡遠景（都府楼跡からの眺望）

令和の都太宰府ゆかりの人々（３）近世

亀井南冥　かめいなんめい

寛保３(1743)年姪浜村の村医の家に生まれた南冥は儒学と医学を修め、私塾「南冥堂」を開きます。これが評判となり、儒員兼医師として福岡藩に取り立てられ、天明４(1784)年東西二つの藩校が新設されると、西学問所甘棠館の学長に抜擢されました。文名高く「関西無双」とも評された彼のもとには多くの門人が集い、そこから優れた人材を輩出しました。しかし幕府の「寛政異学の禁」の影響で藩内の派閥抗争に敗れたことなどから失脚し、甘棠館学長を罷免された上、蟄居禁足処分を受けます。その後甘棠館は火災が原因で廃止となり、また自宅も数度の火災に見舞われるなど、悲運につきまとわれ、不遇の晩年を過ごしました。

大宰府政庁跡に建つ「太宰府碑」は、寛政元(1789)年に南冥が起草した文章ですが、藩から筆禍を受け、生前の建碑はかないませんでした。南冥没後 100 年の大正３(1914)年、彼を慕う人々により石碑が建立され、太宰府に対する南冥の思いを今に伝えてくれています。

大宰府政庁跡に建つ「太宰府碑」

齋藤秋圃　さいとうしゅうほ

近世後期に活躍した絵師、齋藤秋圃は、筑前四大絵師の一人に数えられます。最初、上方画壇を代表する絵師である円山応挙や森狙仙に師事し、当時刊行した大坂新町の遊郭の女性たちを描いた『葵氏艶譜』は秋圃の代表作の一つとなりました。30 代後半に出かけた長崎の旅で、秋月藩主黒田長舒に画才を認められ、秋月藩御抱え絵師に登用されます。文政11(1828)年に隠居願いを出し、その後太宰府へ移り住み、亡くなるまで太宰府の地で町絵師としての画業のかたわら、吉嗣梅仙、萱島鶴栖など、のちの太宰府画壇を代表する絵師たちを育てました。動物、特に鹿の絵を得意とし、「鹿の秋圃」と呼ばれました。また代表作の一つには「博多・太宰府図屏風」があります。近年、齋藤家に遺された画稿類や文書類が太宰府市教育委員会に寄贈され、市の有形文化財に指定されました。

ユーモラスに描かれた鍾馗と邪鬼の図（齋藤家資料「鍾馗図冊」、太宰府市教育委員会所蔵）

令和の都太宰府ゆかりの人々（４）近現代

古川勝隆　ふるかわかつたか

大正元(1912)～９年に旧太宰府町の町長を務めた古川勝隆は、菅原道真ゆかりの伝説を持つ「金掛けの梅」でも知られる五条の旧家・古川家の 73 代目に当たり、生涯質素な生活を大切にしたといわれます。

町長在任中は、各集落の共有地を町有に変えて植林を行い、町財政を豊かにするための造林事業を推進しました。この取り組みは大正 12 年に農商務省山林局が作成した報告書『部落有林野統一事例』で紹介されています。

何年も継続する事業のおかげで町には新たな雇用と森林資源が生まれ、生産性の低い草地は森林へと変わっていきました。

町長時代の肖像

双葉山定次　ふたばやまさだじ

国立国会図書館「近代日本人の肖像」(https://www.ndl.go.jp/portrait/)より

角界史上最強とも言われる力士・双葉山定次は、明治 45(1912)年に大分県宇佐郡天津村(現宇佐市)に生まれ、昭和２(1927)年に立浪部屋に入門、同 12 年に横綱となります。優勝回数は 12 回、昭和 11 年から 14 年にかけては未踏の本場所 69 連勝を達成する大横綱・双葉山ですが、実はここ太宰府と深い縁を持っています。

昭和 16 年３月、相撲の祖・野見宿禰顕彰事業の一つとして、立浪部屋一門の奉納相撲が太宰府天満宮で開催されました。当時の新聞は、双葉山始め大関羽黒山等力士 120 人、行司・三役等を含めると総勢 300 人余りが、太宰府と武蔵温泉に滞在したと報じています。

昭和 18 年の秋、双葉山は四王寺山麓に一般人を対象とした道場を開きます。双葉山は東京と太宰府を拠点に活動しますが、道場の維持は厳しく、昭和 23 年、福岡県に売却しました。以後、「双葉」の名を残して道場は生まれ変わり、高齢者福祉施設として活用されました。

三条にあった双葉山道場(八尋家資料 20)

『太宰府人物志』購読のご案内

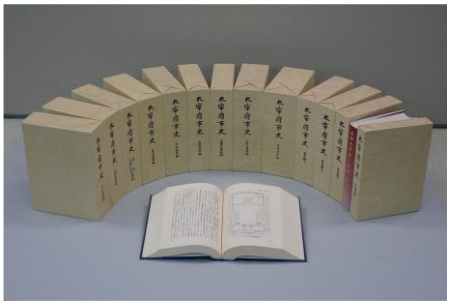
『太宰府人物志』
編集：太宰府市総務部情報・公文書館推進課市史資料室
発行：太宰府市
発行日：平成 25 年 3 月 31 日
頒価：1,000 円

今回のパネル展で取り上げた『太宰府人物志』は、下記の方法で購入できます。

◆書店等での購入
直接購入ご希望の場合は、下記の書店等で取り扱っています。
〈太宰府市内〉
市役所 2 階文書情報課・公文書館・太宰府館・大宰府展示館・太宰府市文化ふれあい館
〈福岡市内〉
政府刊行物福岡県庁店
◆郵送による購入もできます。詳しくは、太宰府市公文書館までお問合せください。

新元号「令和」の出典『万葉集』所収の“梅花の宴”について、『太宰府市史』が詳しく解説しています!!

◎「梅花の宴」を詳しく知りたい場合は
『太宰府市史　通史編Ⅰ』
◎「梅花の宴」の原文および注釈を調べたい場合は**『太宰府市史　古代資料編』**
◎『万葉集』の中で、大宰府で詠まれた歌を調べたい場合は**『太宰府市史　文芸資料編』**
販売価格：１冊　５，０００円
(郵送の場合は送料実費が別に必要です)
問い合わせ：太宰府市公文書館

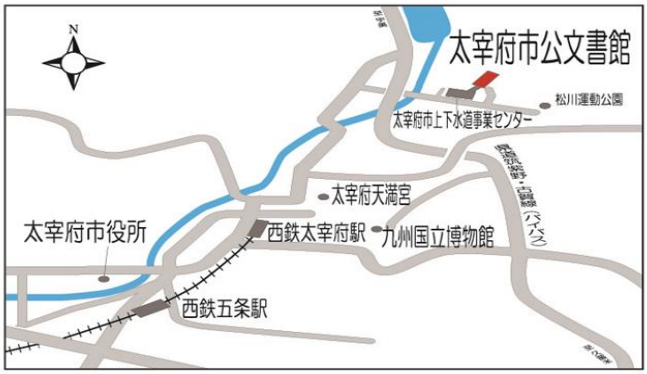


『太宰府市史』は、ふるさと納税の返礼品にもなっています。

この機会にぜひ、ご検討ください!!
154,000 円の寄附金額で全巻(13 巻 14 冊)
33,000 円の寄附金額で「令和セット」
（通史編Ⅰ・古代資料編・文芸資料編）

公文書館へお越しになるなら～アクセス・ご利用案内～

公共交通機関ご利用の場合は、コミュニティバス「まほろば号」（北谷回り）にご乗車ください。
西鉄五条駅 or 西鉄太宰府駅（太宰府線）⇒上下



閲覧時間　午前 9 時～午後 4 時 30 分
（閲覧のための入館は午後 4 時まで）
閉　館　日　毎週土曜日・日曜日、祝日
年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）

太宰府市公文書館通信　Vol.6

編　集：太宰府市公文書館
〒818-0110
福岡県太宰府市御笠五丁目 3 番 1 号
電話：(921)2322　（直通、FAX 兼用）
E-mail：kobunshokan@city.dazaifu.lg.jp
発　行：太宰府市
発行日：令和 4 年 7 月 15 日